

大学教員と学生を結ぶコミュニケーションツールの有用性の検討

Examination of the Usefulness of Communication Tools
between University Faculty Member and Students

柳澤 美和 (Miwa Yanagisawa) 指導：向後 千春

1. 問題

大学の講義は、学生が受け身になりがちという問題がある。それを防止するために、大学教員と学生のコミュニケーションを促進するものとして、「大福帳（A4版の厚紙に枠を両面印刷したもの）」（織田 1991, 2006）がある。

大福帳には、大学教員名、授業名、学生の所属、学籍番号、氏名欄、学生からの伝言板、大学教員からの伝言板が記入可能になっている（織田 1991）。

2. 研究1：大福帳の指導者側からの返信の必要性和返信の有無による授業要因・授業満足度への影響

2.1. 目的と方法

大福帳の返信に関して、時間がかかるが大福帳への手書きのコメントと、時間は短縮されるスタンプの変化をみていくことを目的とした。調査方法は、ABABデザインを使用した。Aの期間は、大福帳にTAからの返信がある期間とした。Bの期間は、大福帳にTAからの返信をせずに、スタンプを押す期間とした。A、Bのそれぞれの期間終了した次の週の授業終了間際に大福帳に関してのアンケートをとった。

2.2. 結果と考察

第1回目アンケートから第4回目アンケートで「大福帳を書くこと」の価値及び期待の項目について、1要因4水準の分散分析を行った結果、価値項目に関しては、10%水準で有意であり、期待項目に関しては、有意差はなかった ($F(3,236) = 2.64, p < .10$; $F(3,236) = 0.35, n.s.$)。

大福帳の平均値は、価値及び、期待の項目に関して、TAからの返信でもスタンプでも4前後という結果となった。大福帳への返信によって、価値及び、期待の項目どちらも、大福帳への評価は変化がないと推測される。

授業満足度として、授業の構成要因の8つの項目が、ARCSの4つの下位尺度得点の平均値に与える影響を検討するために、SPSSを使用し、重回帰分析ステップワイズ法を行なった。「アイスブレイク（1分間スピーチ）」、「レクチャーを受けること」、「大福帳を書くこと」から、授業満足度に対する標準偏回帰係数 (β) は有意であった（図1）。

授業要因は、大福帳の返信の有無で影響はないことが推測された。すべての授業要因において価値及び期待項目に関して、4以上という結果となり、評価が高かった。大福帳の返信の有無で影響はないと考えられるが、大福帳の学

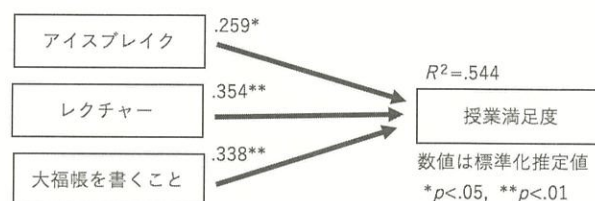


図1 「よかった」項目による重回帰分析結果

生からのコメントは、授業要因に変化があると、その変化を受けた内容が多くなった。その為、大福帳の返信の有無で、授業要因に影響はないが、学生からのコメント内容は変化が出ると考えられる。

3. 研究2：大福帳と授業満足度との関係

3.1. 目的と方法

大福帳の返信に関して、学生から返信を求められた場合と、質問の時のみ手書きのコメントをした。大福帳への返信は、TAがすることとし、TAが答えられないものに関しては、大学教員が返信することとした。それ以外は、スタンプで返信をした。また、授業を休んでしまった学生には、学生からの伝言板のところに斜線を引いた。大福帳への返信をスタンプですることによって授業満足度に影響はあるのかをみていくことを目的とした。

3.2. 結果と考察

授業満足度を上げるためには、「大福帳を書くこと」に関して、「大福帳を書くこと」で満足したと強く感じると、授業満足度が上がることが示唆された（図2）。また、大福帳の返信の有無は関係なく、大福帳を書くことで満足したと考えられる。



図2 「書くことで満足した」項目による単回帰分析結果

4. 結論

大福帳を書くことは返信の有無に関係なく、授業満足度に影響を与えるものとして、大福帳を書くことは、大学授業において有用であり、大学教員にとっては、学生の授業の捉え方を理解することが可能である。